

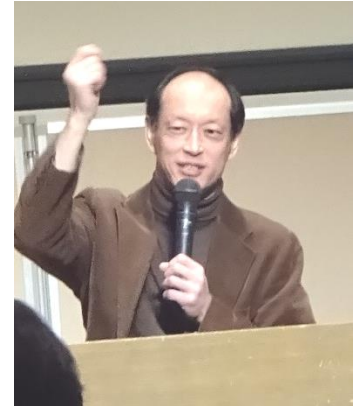
指揮者 横島勝人先生 スペシャルトーク

——ブラームス（ドイツ・レクイエム）を語る——

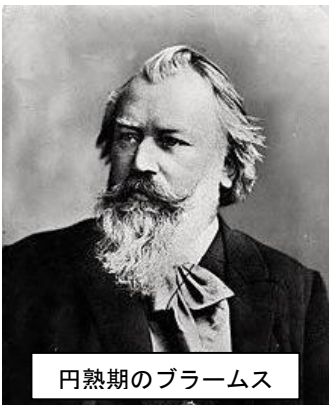
2017/3/13於:コラーレ (VTRより採録)要旨

1. 音楽監督就任ごあいさつ

このたび黒部第九の会 音楽監督に就任させて頂きましたが、光栄であり責任も感じています。私は2006年12月第8回第九コンサート以来継続して客演指揮者を務めて来ましたが、これからは客演でなくコンサートを皆さんと造り上げて行く立場になります。私の経験をもとに、旗振り役案内役として音楽的に必要な提案をして責任を果たしたいと思っています。皆さんと一緒に音楽を考え行動し、音楽によって地域の文化活動にも貢献したいと望んでいます。



2. 「ドイツ・レクイエム」をお勧めする理由



円熟期のブラームス

今回第九を歌う会に「ドイツ・レクイエム」をお勧めしたわけはブラームスの音楽をもっと知ってほしいと思っているからです。この曲は合唱曲で、長い曲ですが、美しく素晴らしい音楽です。ブラームスはモーツァルトやベートーベンほど一般的でないイメージかもしれませんが、実はすごく魅力的なのです。知れば知るほどすばらしいのです。また、せっかく合唱をやるならぜひ合唱曲を歌ってほしいと思うのです。

第九を歌う会が第九以外に挑戦することの意味は、そのことによってよりよい第九演奏（合唱）ができるようになるからです。だから以前にモーツァルトのレクイエムをお勧めして2回やりました。そして想定通りよい合唱ができるようになりました。今度再び第九以外の曲に挑戦したいとの相談を受けました。合唱曲は他に多くありますが、ブラームスのドイツ・レクイエムをお勧めしたのはそれが素晴らしい音楽だからです。

3. 音楽家ブラームスの生い立ち

世の中で人はその性格(人間性)によって人生さまざまな場面でチャンスに巡り会います。私は若いころ小澤征爾さんの教える機会がありました。その小澤征爾さんは気さくな性格で、世界的指揮者カラヤンやバーンスタインに出会い、オペラを指揮しなければほんものの指揮者でないと教えられ、実践し、名指揮者になる機会を得られて今日があるのです。

ヨハネス・ブラームス（1833–1897）が活躍したのは19世紀後半です。世界は波乱の時代でした。(ヨーロッパで自由主義の嵐が吹き荒れていた。日本は江戸末期から明治維新初期)、歴史は紆余曲折しながら大きく転換するそんな時代でした。(音楽界ではロマン派時代という)

ブラームスは幼少のころから非常に音楽的才能がありましたが、なかなか世に認められる機会に恵まれなかった。父親の勧めで幼少期にバイオリンに親しみ家計の助けに演奏したり



若き日のブラームス (1853年)

していました。7歳ごろからピアノを学び始め、音楽の才能がどんどん開花してきました。10歳代半ばには一流のピアニストになりました。活動の舞台は徐々に広がりを見せていました。

4. 先輩のシューマンと親友のヨアヒム

ローベルト・シューマン(1810-1856)



シューマンと妻クララ

ブラームスは20歳の1853年9月、ピアノ伴奏者として協力していたハンガリー出身バイオリニストのヨアヒムのすすめでシューマンに会って作曲した楽譜を見てもらい自作曲のピアノ演奏をしました。その前にも若いブラームスは何回かシューマンに作曲した楽譜を届けたが無視されていました。しかしブラームスの持参した曲を彼の素晴らしいピアノ演奏で妻のクララと一緒に聴き込み絶賛しました。ついにシューマンはブラームスのたぐいまれな才能に気づきました。そして「新音楽時報」という冊子(1853年10月28日号)に論文「新しき道」を掲載しブラームスを世に紹介しました。(以下、ブラームスを紹介した文章の一部分を記します。)

『近年当地音楽界では新しい才能を持った者が出てきているように思う。これら選ばれた人々の辿った道は徐々に段階を経てマイスターになるものもいるだろうが、ミネルヴァ(智慧の女神)のように突然出現するものもいる。いままさにそういう人物が出現したのである。ヨハネス・ブラームスである。……………彼がその持てる魔法の杖を振りおろし、合唱やオーケストラの幾多の能力に彼の力を付与するようになるならばその時、我々の精神世界には一層神秘的な輝きが現れることだろう。(=彼(ブラームス)がいろいろなことを経験して力をつけてくれば今まで音楽で我々に見えていなかったものを見せてくれるような作品を作るだろう)……………最高の守護神が彼を力づけることを願う……………』

このシューマンの論文は文庫版(新潮社)で見ることができます。シューマンがいかによりブラームスの才能を高く評価したかがわかります。こうしてシューマンの紹介でブラームスの名声は世に広がり、新進音楽家・作曲家としての地位が急速に高まったのです。シューマンはまた出版社にブラームスを紹介し楽譜出版を促した。おかげでブラームスはシューマンと妻のクララやその家族の温かい友情に浸り、精神的にも大いに勇気付けられ自信を深めました。しかしシューマンは不幸にもこのあと、1856年に病死しましたが、クララとの交流はこの後ずっと生涯続きました。



ローベルト・シューマン

ヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)



バイオリニスト ヨアヒム

ブラームスが知遇を得て音楽家人生に大きく影響を受けたもう一人、ハンガリー生まれのバイオリニスト ヨアヒムがあげられます。ブラームスが20歳のときに知り合い、意気投合し、ブラームスは作曲した曲をヨアヒムに見せて意見を聞くなどして、作曲家として成長しました。ヨアヒムの演奏会のピアノ伴奏をしたりした。ブラームスの音楽はこのヨアヒムからも影響を受けました。演奏旅行でハンガリーの音楽に触れることも多くありました。チャールダッシュのような遅い部分と速い部分があるのが特徴です。和声もヨーロッパ風と言うよりもアジアっぽい音楽です。ブラームスはこの二人(シューマンとヨアヒム)との交流によって音楽的要素を身につ

け磨き成長し、音楽家としての地位を固めて行きました。ピアニストブラームスから作曲家ブラームスに進んで行ったのです。

5. 人間ブラームスとその音楽

ブラームスの活躍していた19世紀後半の世界は波瀾万丈の時代、科学技術の進歩した時代。蓄音器が発明されブラームスが作品を録音しました。新しいものが受ける時代でした。音楽家たちも時代の刺激を受け、新しい音楽を目指す雰囲気が強かった時代でした。(ロマン主義) ワグナー、リヒャルトシュトラウスなど飛んでいる人たちが音をとんでもない方向に飛ばすような音楽を作っていました。そういう中でブラームスはそういう音楽はそのうちに必ずうまいくなくなるだろうと考えました。ブラームスの音楽は例えていえば外見は古い家に見えるが内部は最新鋭のつくりになっている建築のようなもの。ブラームスは「古いものはいいよ」と考えた。つまり時代に逆行していたのです。それで客の反応もよくなかった。しかし今に至ってみるとブラームスの音楽は現代の今も受けています。演奏され、聴かれています。つまり、つくりは現代だが、エキ스는モーツァルトやベートーベンから受け継いだものなのです。ブラームスは新しいものしか売れない時代に時の流れに従わなかった。新しい考えに飛びつかず、冷静に古典派的音楽を目指しました。

ブラームスはハイドン、モーツァルト、ベートーベンをすごく尊敬し研究していました。家にはそれらの膨大な楽譜が研究し尽くされて残っています。あのベートーベンの第九のような、音が集まる、テンションの高い音楽……その偉大さを十分に知り尽くしていた。だからこそそのエキス(要素)をつかんだ上で新しい曲を作ろうとした。だから現代でもブラームスの音楽はよく演奏されるのです。例えば弦楽四重奏曲ですが、ベートーベン、メンデルスゾーン、シューベルトなどとブラームスのそれはイコールの価値があります。ブラームスの交響曲と協奏曲、室内楽はその3人のものと並ぶくらいに評価されています。ブラームスの作曲メモは交響曲用のメモがその後協奏曲に使われたり、変更が多くありました。それは彼が非常に研究熱心であったということの証拠でもあります。

ブラームスはモーツァルト的天才ではなかったが、努力と自制の強い意志の力は抜群だと言えます。いま時代は違いうけれどブラームスが残っているのはブラームスの才能と努力と研究熱心さによるのです。それを触発したのがシューマンとヨアヒムだったと言えます。

ブラームスは生涯結婚しませんでした。若いころはハンサムで今でいうイケメンでした。しかし結婚の機会はなかったが音楽の創作活動が楽しくて結婚しなかった。結婚を約束したこともあったが、作曲の邪魔になることを怖れて破談にしたことさえあります。非常に生真面目な人でした。彼はシューマン夫人(クララ・シューマン)を終生にわたり非常に尊敬していたと伝えられています。

6. ブラームスの「ドイツ・レクイエム」について

「レクイエム」とは何か？ “Requiem“(ラテン語「安息を」の意) まずその定義を見ると ①基本的に死者の靈魂を慰める音楽であること。 ②歌詞はキリスト教カトリックの典礼文であり、ラテン語である。つまり、死者の安息を神に願うカトリック教会のミサで使用される聖歌です。

しかし、ブラームスのレクイエムは①亡くなった人を慰めるのでなく、死者に先立たれて残った人を慰める音楽。②歌詞はルターの書いた聖書からブラームスが選んだ言葉で、ドイツ語。③レクイエムと名付けられているけれど宗教的な音楽曲ではなくて現代を生きる人々に役立つ人生の指針ともいえる、演奏会用の音楽。ブラームスはこの曲に「ドイツ・レクイエム」と題を付けたが、「人間レクイエム」でも構わない、生きている人を慰め励ます曲だと言っていたのです。

ブラームスがドイツレクイエムを書いた経緯を話します。ブラームスが33歳の1865年、母が急死しました。1856年シューマンの死のころからレクイエム作曲の思いがあったようですが、母の死をきっかけに母のために何か作曲しようとしてこのドイツレクイエムを完成させました。(初演1868年4月10日)。最初にできたのは6曲で、しかし神を崇める個所がないのです。7楽章が完成し演奏されたのは1869年2月18日、以後ヨーロッパ各地で演奏され大成功を収めました。

ドイツレクイエムには音楽的によ
いものがいっぱい入っています。ベ
ートーベンから受け継いだ音楽のエ
キスが入っているおすすめ品です。
特に7番が美しい。このレクイエム完



成によってピアニストブラームスは作曲家ブラームスに進化することができたのです。彼を取り巻く環境は大きく変わりました。そうしてそのあとブラームスは交響曲の作曲に進みました。第1交響曲は10年後に完成しました。

ドイツレクイエムはブラームスの人生観・世界観を表現した彼の最高傑作です。ですから私はこの黒部の合唱団に「ベートーベン第九をやり、モーツァルトのレクイエムをやり、次に何をやるかと言えばそれならブラームスのドイツレクイエムをやられたらよい」とお薦めしたのです。合唱曲ですから、ぜひ歌ってほしい。そしてブラームスを味わってほしい。第7曲が本当に美しい。初回目は第1、4、7曲をやり、2回目で全曲をやります。私も一所懸命指導します。皆さん頑張って下さい。

最後にお願いします。合唱団の人数が足りません。現状では力が不足です。ソプラノで10人、アルトも10人、テナー5名、バス10名ぐらいほしい。よい合唱にしてコンサートを成功させるために団員を集めるのも練習のうちです。一人一人の活動が役立ちます。ご清聴ありがとうございました。

黒部で第九を歌う会 2017年7月13日 (文責:島倉敏夫)

略年譜

ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms の生涯 日本大百科全書(ニッポニカ)より抜粋

- 1833年5月7日 ドイツ ハンブルグに生まれる。幼いころから父に音楽(バイオリン)の手ほどきを受ける。
- 1840年 (7歳) ピアノを習い始め、すぐに才能が認められる。
- 1843年 (10歳) ピアニストとしてデビュー。
- 1845年 (12歳) 作曲と音楽理論を学び始める。(この頃家計を助けるために編曲やピアノ演奏などする)
- 1849年 (16歳) のちにマルクスの筆名で出版された「ロシアの思い出」を作る。
- 1853年 (20歳) ハンガリーのバイオリニスト レマーニと演奏旅行。ヨアヒムと知り合う。
- 同年9月30日 デュッセルドルフにシューマン夫妻を訪れ、自作曲を演奏し、家族との交流が始まる。
- 1856年 (23歳) ローベルト・シューマン病没(46歳)
- 1857年 (24歳) デトモルト宮廷のピアニスト兼合唱指揮者として初めての公職に就く。(59年辞職)このころ『子守唄』作曲
- 1863年～64年 (30—31歳) 合唱団ジンクアカデミー指揮者
- 1865年 (32歳) 母クリスティアーネ 死去
- 1868年 (35歳) 『ドイツ・レクイエム』完成
- 1872年 (40歳) 父ヤーコブ死去 この後ウィーンに定住
- 1872—75 (39—42歳) 楽友協会演奏会指揮者 17, 18世紀音楽を積極的に発掘
- 1870年代後半～ 作曲が活発に進む 1876年 (43歳) 交響曲第1番完成
- 1877—1879(44歳—46歳) 交響曲第2番、バイオリン協奏曲、多数の歌曲、ピアノ小品
- 1879年 (46歳) プレスラウ大学から名誉博士号(大学祝典序曲を贈呈)
- 1881年 (48歳) ピアノ協奏曲第2番完成 1883年 (50歳) 交響曲第3番完成 1885年 (52歳) 交響曲第4番完成
- 1880年代末(50歳代半ば) ハンブルグ市名誉市民賞
- 1890年 (57歳) いったん引退を考え、翌年遺書を書く。厳格な自己批判から過去の不満足な作品を多数廃棄した。
- 1895年 (62歳) オーストリア皇帝から「芸術と科学に対する十字勲章」を授与される
- 1896年 (63歳) クララ・シューマン 死去
- 1897年4月3日 死去(64歳)